

第六章 再び上海

昭和八年六月十七日。慰労休日のため大阪市内に遊びに出た陸軍第四師団歩兵第八連隊の中村一等兵は走ってきた市電に乗るために赤信号を無視して交差点を渡ったところを大阪府警曾根崎警察署交通係の戸田巡査につかまり、天六派出所に連行された。

中村一等兵は、軍人は憲兵には従うが警察官の命令に服する義務はないと抵抗し、「なんやねん。」

「なんやねんがなんやねん。」

「なんやねんがなんやねんがなんやねん。」

とドツキ合いが始まり、双方が怪我をする事件となった。

この事件に対して第四師団参謀長の井関大佐は

「この事件は一兵士と一巡査の事件やおまへん。皇軍の威信に関わる問題やねん。」

と、警察に謝罪を主張。こないなめられて黙ってるような大阪府警やおまへん。

「軍隊が陛下の軍隊や言わはるなら、警察かて陛下の警察や、何で謝る必要があんねん。ボケ！」

と主張。

さらに陸軍第四師団長の寺内中将と縣大阪府知事の交渉も

「なんやねん。」

「なんやねんがなんやねん。」

「なんやねんがなんやねんがなんやねん。」

と見事に決裂。

ついには荒木貞夫陸軍大臣が出てきて

「陸軍の名誉にかけて大阪府警に謝らせる。」

といきまいて、山本達夫内務大臣と対立する局面に至った。

この事件を担当した警察署長が心労のあまり急死したり、目撃していた男性が電車にひかれて謎の死を遂げる事態に至った。

一兵隊と巡査が起こした軋轢が次第に大きな問題となり、天皇陛下の知るところとなつて勅命により収束をした。

世に「ゴーストツプ事件」とか「天六事件」と呼ばれる事件である。

「なんやねん！」

第八連隊の深夜の事務局で中隊長の大声が響いた。

「まあまあ、中隊長。所詮遊びやねん。本気になつたらあきまへんで。」

小尉の階級章を付けた将校がなだめた。

「せやけどあんたあ。わしゃあ大三元テン。パツテたんや。それをこの二等兵、ツモのみで潰しよつて、わややでえ。どないしてくれようねん。」

雀卓の対面には点棒が山積みになった二等兵赤井五平(うーびん)が顔色も変えず、

「小さなことからコツコツと。地道に行かなあきまへんでえ。」

と鼻眼鏡の位置を直しながら今しがた自模つたウーピンをくるくる回していた。

その後も赤井五平二等兵は和了を繰り返し、カモになった大隊長は大負けをしてしまった。南四局が終わった時、軍票を全て巻き上げられ、下賜の軍刀まで赤井五平に差し押さえられた中隊長は

「お前なんか大阪から追い出してやる！最前線に飛ばしたる！戦死させたる！」と泣きながら恨み言を叫んだ。

そんな声に耳もかさず赤井五平は兵舎に戻ったが、翌朝、第八連隊上海駐屯に異動の辞令が出た。

「またも負けたか八連隊、それでは勲章九連隊（くれんたい）。」

この時代、子供たちにまで歌われた大阪の第八連隊と京都の第九連隊は商人気質と相まって軍人らしからぬイメージが世に広まっていた。

運の良し悪しもこうした評判には絶妙にかかわっているもので、ノモンハン事件の時に北滿に向かった第八連隊だが、到着する前に停戦してしまい、その後は上海に駐屯していた。

その頃、広島駅のホームでは出征兵を見送る人たちのバンザイが繰り返されていた。

「未造君の武運を願ってバンザイ！」

そのたびに一札を繰り返す青年の隣には身重の妻がいた。

未造上等兵にとって二度目の赤紙だった。軍事産業の多かった広島で技術者として活躍していたので、徴兵と言っても戦地に赴くわけでもなく、戦車や軍用車の整備を専門とする技師として徴用されていた。しかし、此度の招集は技術者不足に悩む支那大陸に赴任させられることになった。

「まさかとは思いますが、もし米英が本土に迫るとすれば、軍需工業の多い広島だろう。戦局が悪くなったら迷うことなく比婆の権之助さんの所に非難しなさい。」

前回の徴兵で日本とアメリカの生産量の差を知っていた未造技師は、最後は物量の違いが出るのではなからうか？と冷静に戦局を読んでいたため、妻にそう言い聞かせていた。

未造技師は広島から下関まで列車で行き、関門海峡を船で渡って門司についた。高射砲から銃火器まで製造している小倉陸軍造兵廠に行き、上海へ赴くよう軍令を拝命した。

その頃、上海に向かう輸送船に乗るために小倉まで来た赤井五平は夕暮れの街にいた。静かに耳を澄ませると求めている物の音がした。"雀の声や"

バラックな木造家屋の二階へと階段を上って行くと、たばこの煙と明かりがドアの隙間から漏れていた。ドアを少し開けて顔だけ入れてみると四台の雀卓で男たちが麻雀をしていた。

「よろしいですか？」

と声をかけると、鉢巻を撒いてラクダの腹巻をした角刈りの男が

「ええとこゝろに来てくれよつた。今日はまるつきし引きのなかあ。あんた、こゝば座りんしやう。」

赤井五平は男に席を譲ってもらってルールの違いなどを軽く確認した。

麻雀を打っているうちに奇妙な違和感に気が付いた。手が読まれている。先ほど譲ってくれ

た男は赤井五平の背後の雀卓で仲間と話しながら打っているようだが、どうやらこちらを覗き見てはサインを送っているらしい。

二対一ならまだしもこれは状況が悪すぎる。宮本武蔵の「五輪の書」にも三人以上を相手にしないよう書かれている。常に三人以上を相手にせず済むように自分の立ち位置を心がけること。でも、基本的に麻雀は四人でやるものだから、通常二対一以上になるようなことはい。それに赤井五平が「五輪の書」を読んでいたとはとても思えない。

逃げ道を確認しながら赤井五平は大胆な手を打つてみた。

麻雀牌を伏せたまま打つ”盲牌(もうばい)”と言う技である。指先の感覚で麻雀牌を読むのである。これをやられては背後から赤井五平の手を読むことはできない。

「大阪ん人は面白かことばやりよるけんあ。」

と、当初は面白がっていたが、赤井五平が間違えることもなく次々と和了を繰り返すうちにだんだんと雰囲気は怪しくなってきた。

「それ当たりや。ニアンコー。」

と牌を返すと、男たちが立ち上がった。とっさに裸電球に牌を投げつけると音をたてて電球が割れて部屋の中が真っ暗になった。

今だ！赤井五平は窓に向かつて飛びかかり、ガラスを破つて外に出て、一階上の瓦屋根を転がりながら通りに落ちた。

「窓の修繕代はわいの勝ち点から引いたってやあ。」

と叫ぶと急いでその場を走り去った。

”ついてへんで、麻雀以外はホンマついてへんで。”と、ぼやきながらも、麻雀が彼自身の身に不運をもたらしているとは思ってはいなかった。

「やつら、これで当分商売にならへんで。」

赤井五平の手には騒ぎの間に各雀卓から一個ずつ持ち出した使い込まれたウーピンの牌が四つ握られていた。

翌朝、兵器を積んで南に向かう輸送船に赤井五平は乗り込んだ。甲板の上では積み込まれた荷物をチェックする未造技師がいた。

雨や潮気に当たってサビが出ると使い物にならなくなるので、積み込みには細心の気配りが求められ、こうした作業は広島でもさんざん経験していたので手慣れていた未造技師だった。

「なんぞ手伝いましょかあ？」

砕けた言い方をする兵隊だな？しかも関西弁で、と未造技師は横目で赤井五平を睨んだ。

「あんたどこの部隊のもんじゃ？」

「わいは大阪第八連隊のもんや、上海の駐屯に行くことになってん。赤井五平二等兵言います。」

「それじゃあ、赤井二等兵この箱を運ぶの手伝ってもらえるかな？あんた大阪もんか？」

「せや。大坂に来たことあんのん？」

「仕事で高槻にしばらくおったことがあるのう。」

「高槻でつか。けつたいなとこにおつたんやなあ。苦労したやろ。」

「まったく…その通りで…。」

広島人が言葉に出せないほどなんだから、よっぽどひどい目にあつたのだろう。高槻で。

新築された軍需工場の工作機器を設置するために広島から高槻に赴いた未造技師は、共産主義者と朝鮮人に機材を盗まれたり破壊されたりで、現場は採算割れするわ工期は間に合わないわで散々な目にあつたいわくつきの場所だつた。清美と言ううどん屋の娘が破壊活動の中心人物で、正体は朝鮮人だつたのだが、市内の仲間に匿われ警察や憲兵の目を盗んで半島に逃げて潜伏したと言う噂を耳にしていた。広島でも共産主義者が造船所を襲撃するなどの破壊活動を行つていたが、まるで地域全体がこのような破壊活動を後押ししているような土地に思えた。

技術者は徴兵に際して優遇されていたはずだが、今回の二度目の徴兵にはあの時の失敗があつたのではなからうか？と考えると悔しくてならなかつた。

「上等兵はん。船、動き出したようでんなあ。」

作業に夢中になつている間に輸送船は静かに動き出して埠頭を離れ小倉から博多まで眺められるほど陸地から離れていた。

どこの部隊に属しているのかもわからない、単身で船に乗せられたこの二等兵、何かやらかして最前線に送り込まれる兵隊ヤクザか？それにしては迫力がない男だ。

作業が一段落して甲板に出た未造技師は、無心で海を眺めている赤井五平について改めて不審に思つた。

「赤井二等兵は入隊して何年になるんだ？」

「かれこれ半年になりますかのう。」

なんだ、こいつ、初年兵でこの口の利き方は？とムカツとしたが、

「何かやらかして上海に行かされるのか？」

「やらかすと言うより、些細な意見の食い違いでんねん。」

と第八連隊で起きた麻雀事件について語り出した。噂には聞いていたが、第八連隊ではそれもあつか。どちらにしても、呆れて言葉が出ない。未造技師は黙ってしまった。

「そんな暗い顔せんでくださいな。向こうに行けばまたおもしろいことがあります。なんせ、麻雀の発祥地でつからな。どんな猛者がおるか？心がわきまんなあ。」

こいつ、全然懲りてない。未造技師はうつむいてしまった。

前方に対馬が見えた。右に見える小さな島は神宿る島、島全体が宗像大社になっている。沖の島だろうか？未造技師は目を凝らして沖ノ島方面を眺めた。

赤井五平は昨日雀荘の騒動の際にかっぱらつてきた四つのウーピンの牌を、海に向かって投げつけた。

「いいてえー！」

赤井五平が投げた麻雀牌は、沖ノ島にお参りのために玄界灘を泳いでいた秋田のネロさんの頭に当たつていた。

「いつてえなあ。もう。」

ネロさんは頭を押さえながら、西に向かう輸送船を見送つた。

未造技師は上海に向かう船の中で、ノギスを片手に夜を徹して物資の機材の点検をしていた。わずかな大きさの違いが使い物にならない部品になったり、事故を起す原因となる。もちろん出荷するとき厳密に検査しているが、更に入念にチェックすることで安全を高めようと苦心していた。

赤井五平も手伝っていたが、近眼で慣れない作業なのであまりあてにはしていなかった。「あれ、これ少し歪んでるわ。」

時折、赤井五平が見つける不具合は、ノギスで小さな点を計っている気が付かないことだった。未造技師は赤井五平の動きに注意しながら作業していたが、指先で撫でただけで歪みを見つけていることに気が付いた。

「赤井二等兵は指先でそんなことがわかるのか？」

これは優れた能力だと驚いた。

「なんや知らんけど、麻雀してたらこうなってもうたんや。」

何事も一芸に秀でると言うことは努力もあるうが、天分の才もあるのだろうなと未造技師は思った。

上海の港に到着すると、乗り込んできた第八連隊上海駐屯兵に両脇を抱えられるようにして赤井五平は船を下りた。

未造技師はまだ積み下ろしのために荷物と共に船に残らねばならなかった。

駐屯地についた赤井五平は机ひとつと椅子しかない部屋に放り込まれた。

「なんや？軍法会議にもかけていきなり営巢(懲罰房)かいな。それやったらこない辺鄙などこまでけえへんかて、大阪でもええんちゃうか？」

「赤井二等兵、気を付けえ！」

軍曹の階級章を付けた下士官が入ってくるなり赤井五平の座っていた椅子を蹴り上げた。「こういうのが嫌いなんや！」とムカツとしながらも立ち上がり気を付けの姿勢をとった。

「貴様のようなクズ、すぐにでも前線に送ってやりたいところだがな、奇特にも貴様などに興味を持って下さるお方がおられてな、これから面談だ。失礼のないようにせよ。敬礼！」

赤井五平は敬礼の姿勢をとると軍服ではなく背広を着た将校が入ってきた。恰幅の良いを通り越してメタボ体系のスキンヘッドの男がニコニコしながら椅子に座った。ショウ・チャンツーである。

「こちらは正ちゃん中尉である！」

「また将校はんか。せやけど、けつたいなおっさんやな。これで軍人はんか？」

「まあ堅苦しくなるな。私の場合”中尉”と言っても”要注意”の中尉だ。堅苦しいのは私も嫌いだ！いつまでも突つ立ってないで座りなさい。あ、軍曹！君は席を外したまえ。」

「それはできません。中尉殿に付き添うよう命令が出ております。」

「上には私から言っとくからとりあえず君は退席しなさい。軍事機密もある。」

”中尉に要注意。我ながら今日さえているぞ！”ショウ・チャンツーは自分を褒めたたえたかった。

軍曹が出て行ったのを確認したショウ・チャンツーは

「楽にしなさい。君は軍隊が嫌いかね？……私は嫌いだ。」

「そないはつきり言われても一言では答えられまへんがなあ。威張り腐る軍人はんは嫌いやけど、食うには困らへん。そんなとこでつかいな。」

「はつきり言うなあ。それでいい。君はマージャンに長けているそうだね。」

「麻雀でつか？大尉はんも好きでつか？ああ、それで上海に飛ばされたんか！」

「私はそれほど得意じゃないが、その技が生かせるなら働いてみたいと思わないかね？」

いよいよツギが回ってきた！と赤井五平は小躍りした。この上海の地で米英支那を相手に雀卓を囲む自分の姿を想像した。

「君は小倉でも大暴れして来たようだね。」

「え？なんでそんなことまで知ってはんのですか？」

「そういう仕事だからね。」

かくして赤井五平は陸軍特務機関に引き込まれ、シヨウ・チャンツーの指導の元、”ウーピン”と呼ばれ支那大陸の各地で工作活動をするようになったのだった。

一方、未造上等兵は上海に物資をおろした後、伍長として四川省の重慶に転属となった。

その頃与一君は次の指令でソビエト軍の情勢を探るために北支へ移ることになったのだった。